

# 幼児の言語的伝達における自己中心性の問題

鈴木 敏 昭

Egocentrism in children's verbal communication

SUZUKI Toshiaki

認知発達において自己意識や他者理解のもつ意義は重要な問題領域である。本稿で取り上げる言語的対象指示伝達 (referential communication) に関する諸実験もそのような領域の一つである。そこでの主な論点は Piaget が提起した幼児期の「自己中心性」の問題である。それは子ども心理機能において社会性をどう捉えるかの問題であり、同時に認知機能にとって自己とは何かという問題でもある。

## I. Piaget における「自己中心性」

### (1) 言語的自己中心性の現象

Piaget (1948) は初期の実験的研究で6歳児の発話が機能によって2種に分類できることを報告している。他者の見地を考慮せずに自分のために話す自己中心的言語と伝達を目的とした社会化された言語である。全発話に占める自己中心的言語の割合(自己中心性係数)は約0.45であった。さらにこの係数は年齢と共に減少することが示された。しかし、自己中心的言語は後に Выгорский の批判を招いたように「内言」という特別の問題を含むので、幼児期の自己中心性を論じるには適さないとされる。言語伝達での自己中心性を調べたものに小話と簡単な機械について他者に説明する実験がある。6～8歳児では相手の見地に立たず、自分の見地から恰も相手が細かい点については既に知っているかのように話すのが見られた。

### (2) 自閉的思考→自己中心的思考→社会的(論理的)思考

初期の Piaget は幼児の思考を「自閉的思考」(「象徴的思考」と内容的にも機能的・構造的にも類似したものと捉えていた。「自閉的」は Bleuler から、「象徴的」は Freud から各々借りてきた語で Piaget ではほぼ同義に使われている。「自閉的思考」に対立するのは「社会的(論理的)思考」であり、その中間段階として幼児期の「自己中心性」が捉えられている。「象徴的思考」の特徴は Piaget (1923, 1977) によれば、①論理の一貫性の欠如、②イメージの概念に対する優勢、③イメージを相互に結びつける関係の無意識という3つにまとめられる。精神分析では象徴は①抑圧と検閲という無意識の産物であり、②思考の最も原初的経済の様式と見なされているという。「夢作業は覚醒時思考とは質的にまったく別のものであり、だから夢作業を不用意に覚醒時思考に比較することは許されないのである。夢作業はそもそも思考したり計量したり判断を下したりはしないのである」(Freud, 1968, p. 416)。また「自閉的」というのは現実適応的でなく、個人的で他者と言語的交通がないことである。しかし、これは自我という意味の閉じた観

念世界が成立していることを意味しない。「表面的に見ると、象徴的思考は自閉的なので、自我の活発な感情を伴っているはずだと思われるかもしれない。……〔実際は〕自閉性と自我の意識の欠如は相伴った2つの現象なのである。……自我はある意味で社会的現象である」(Piaget, 1923, p. 287)。一方、幼児期以後の社会的で論理的な思考の特徴は意識的で現実に適応し真偽を受け入れる、つまり論理に従い、また概念の使用によって、社会化されており、言語によって伝達可能ということである。では、「自己中心的思考」はどういう意味で「象徴的自閉的思考」と「社会的論理的思考」との中間なのか。第1に、象徴的思考は混沌とし論理的一貫性が全く欠如しているのに対し、思考の方向づけがある程度あり、一時的だが課題を自ら提起することもあること。第2に、象徴的思考は継起する要素の結びつきが全く無意識で情緒的なのに対し、子どもは思考自体を一定捉えられること。第3に、象徴的思考は全く個人的で伝達不能な自閉性をもつものに対し、伝達の意識的努力はないが相手が自分を理解しているという印象を子どもが持っている等の点による。また Piaget (1948) によれば、自閉的思考は非伝達的で全く統御されていないが、自己中心的思考は非伝達的だが実在に適応しようとし、ある程度は統御されている。また自己中心性がもたらす言語的混同性 (synchrétisme) にも「圧縮」と「転移」が見られるが、夢や自閉的想像ほど不合理でも感情的でもない。

### (3) 感覚運動期→自己中心性→操作期

1927年頃から Piaget の発達段階の図式は乳児期の感覚運動的知能から前操作期をへて操作期へ移行するものとして成立したと思われる。すなわち、それまで特別考察されなかった乳児期が運動的適応をなす時期という新しい視点のもとに設定され、幼児期の自己中心性が感覚運動期から操作期への過渡期として位置づけられた。前操作期の自己中心性の本質的特徴の一つは自分の見地と他者の見地の未分化である。それは、物との関係でも他者との関係でも主体としての自分あるいは自分の中の主観的なものを意識しないことからくる。それは様々な見地の中に自分の見地を位置づけられないことでもある。自分の見地が意識されないことは思考が自分自身の行為に中心化していることである。その思考はまた現象論的である。さらに、自・他の視点が未分化なので、他者の示唆や強制を無批判に受け入れてしまう (Piaget, 1947, 1948, 1950, 1951, 1960)。なぜそうなるのか。それは表象の内に操作体系が未成立だからである。象徴機能の点では個人的象徴作用と社会的記号使用の中間状態にある。感覚運動期を通じて獲得した活動面での操作性 (移動群) を表象面で再構成する期間に最初期の自己中心性が再出現するのである。そこで「……言語的自己中心性の研究は……操作的構造の分析……にとってかわらなければならない」(Piaget, 1948, p. 77) のである。では思考を脱中心化させる操作体系はいかに成立するのか、それは社会化とどう関連するのか。Piaget (1947, 1948, 1960, 1966) は個人間の社会的協働関係が論理操作形成の不可欠の条件だという。しかし、個人の論理操作は全く社会的な産物なのでもない。個人間の協働を可能にするのは論理操作の協応でもある。群性体とはその始まりから諸観点の協応なのである。個人間の協働 (coopération) とは共同操作 (co-opération) のことである。すなわち、個人内の操作の可逆性と個人間の共同操作の相互性は相補的であり、同時に論理的でも社会的でもある一つの構造の2側面に他ならない。

### (4) 自己中心性と意識化

自己中心性は自らの視点を意識せずに、対象に向かう前客観的態度のことであった。対人的に

は他者との適応的な相互交渉に無関心な心性であるが、それは論理的関係を考慮しない思考的態度からくる。他者と適応的に相互交渉しようと努める限り、その交渉自体が可逆的性格をもつので自分の思考が操作的であることが必要となる。操作の群性が様々の視点を分化させつつ協応させることを可能にし、自らの視点を意識化することを可能にする。だから自己中心性は意識化の問題でもある。しかし、ここでいう意識化は自分と他者の視点の分化の問題であって、それを可能にする論理操作自体のより完全な意識化は形式操作期で可能となる。論理操作自体の意識化とは行動面でなされた操作を言語面へ移行し再構成することである。そこにデカラージュがある (Piaget, 1924, 1928)。

##### (5) Piaget における「社会性」

Piaget がいう論理操作の社会性とは個人間の協働を意味する。それは一個の自律的個人が相互に対等の関係を結ぶ、いわば意識的適応論からの「社会性」といえよう。「論理的な諸操作は行動から生じるということ、および不可逆的な行動から可逆的な諸操作への移行は必然的に諸行動の社会化に伴われ、この社会化はそれ自身が自己中心性から共同作業へと進んで行く」(Piaget, 1950, 訳書 p. 323)。自己中心性の段階まで子どもは社会化されていないというとき、それは他者と交渉がないことを意味するのではない。Wallon の批判はこの点を誤解していると Piaget (1951) はいう。Wallon 的な見方では「ピアジェは意識を本質的に個人的なものとする伝統的な考え方を越えてはいない。ピアジェによれば、……子どもはまず最初に独我論的な状態 (solipsisme) にあり、そののちに独我論をぬけ出して、さまざまな人格を認める状態 (pluralisme) に達して、社会化されるのであり、社会性は七歳頃になって、子どもに付け加わる」(竹内, 1982, p. 256)ということになる。しかし、Piaget は自分は Rousseau 流の <individualisme> ではないと反論している。思考が自己中心性として始まるという意味は自・他の視点の未分化ということであり、自我の明瞭な意識の欠如ということであって、Wallon のいう融合性 (confusionisme) と実質的に違わないという。また、個人の自律性の獲得は社会的相互性に応じるという点でも Wallon と違わないという。自分が初期に使った「自閉性」という語には論理性を欠き、適切な社会化(視点の分化と協応)を欠くという意味があったことを Wallon は見ていないと Piaget は言う。

Выготский (1962) も Wallon と似た視角から Piaget を批判した。Piaget では思考の発達 は個人的・自閉的なものから自己中心性をへて社会的なものへ移行するが、実際は社会的なものから個人的なものへ発達するという。自閉性は発達初期にあるのではなく、一定の概念的思考が可能となり空想が可能となる後の段階で生じるという。Piaget は子どもが誕生当初から社会的諸関係の中にいることを見ず、社会的なものは子どもにとって外的力として作用すると考え、自己中心性から共同へ移行させる要因を闘争・討論・教育などに見ていると批判する。これに対し、Piaget は自己中心的言語を内言への過渡現象とみた Выготский の説に同意しつつも、諸視点の協応と共同操作の不能としての自己中心性を十分見ていないと反論している。自己中心性を初期には自閉性と結びつけすぎたと自己批判しつつも、やはり象徴遊びなどには方向づけられてない自閉的思考が見られるし、その快樂原則的側面も発達初期の同化優位の感情的側面として説明できるとする。しかも同化優位な時でも、一定の調節、現実適応の側面を伴うことを見落さなかったという。つまり Выготский が言うように思考の自閉的側面と現実適応の側面を2つの発達

段階として分離することは考えなかったという。Piaget (1962) によれば、社会性の意味に2通りある。一つは、観点の分化は問題とせず、相互交渉があることで社会的とするもの。もう一つは、観点の分化と協応に基づく協働をもって社会化されているとするものである。このような意味の違いは Piaget (1928, 1960, 1966) によれば、研究の観点の違いによるのであり矛盾しない。子どもの主体の観点からは他者と交渉をもつという意味で社会的だが、観察者の観点からは子ども自身の活動に中心化しているという意味で自己中心的である。だから、主体の観点では、子どもは出発から社会的で相互依存(融合)の関係をもち、後に個人化することになり、観察者の観点では、子どもは漸進的に社会化し観点の分化により他者と協働関係をもてるようになる。両者は同じことを異なる側面から言っている。以上、Piaget の「自己中心性」の内容を見てきたが、一つの問題は「自己」というものが操作の陰に隠れて見えてこない点であろう。それは Wallon や Выготский の強調する社会的存在から個人化へと進む発達の側面を Piaget が重視しなかったことと無関連ではないだろう。自己中心性の時期は自我の介在による屈接の時期だと Piaget (1928) は言うが、その自我はどう成立し論理操作とどう関連するのか、特に脱中心化と自己意識はどう関連するのか明らかでない。Piaget を補う意味でも重要な問題領域である。

## II. 意識の二重性

### (1) Wallon における「内なる他者」

自我意識の成立過程は Wallon (1946, 1956) によると、およそ次のようになる。まず生理学的に無能力な状態で誕生した乳児は、その生存を周囲のおとなの介護に完全に依存している。1歳頃まで情緒的共生状態が続く。自己と他者の区別は未成立で周囲の人(特に母親)と一体であり、情動の融即性に基づく交流がなされる。1歳頃から、未分化な感受性の中に既にあった二極性がやがて能動的相と受動的相に分解する。この頃、2人の子どもが対比的役割や相補的役割を取るのが見られる。しかし、役割はまだ交換可能でなく固定している。次に、相手に働きかけ、相手から働きかけられるという交替遊比的やりとりがさかんに見られるようになる。他者との役割の交換を通して働きかける者—働きかけられる者という二重性を認識し、やがて自分の感受性の内部に他者性を認識していく。しかし、まだ自分の視点は確立していない。交替遊びの相手は自分と離れた存在ではあるが、両者は等価で交換可能な二者でしかない。3歳頃になって、自我ははっきり他者に対置されるようになる。もはや2つの役割は等価でなく、一方が自我の核として恒常性と安定性を備えてくる。そのことは、他方の役割が消失したのではなく、第二の自我=内なる他者として自我成立の不可欠の補完者となったことを意味する。自我と内なる他者という二重性が自己を意識し他者の中にその一人として自分を位置づけ、他者を他者として意識するのを可能にする。主体の内面におけるこの二項は対立しつつ、一方なしには他方が存在しえない相補的な二項なのである。

### (2) Mead における「I」と「me」

Mead (1973) は社会的行動主義の立場から精神は本質的に社会的現象であり、個人の生物学的諸機能ですら、本来社会的なものであることを主張した。従って、「社会過程内部のコミュニケーションを説明するため、その社会過程に先行するものとして自我というものを前提に」するのではなく「逆に、自我が……コミュニケーションとの関連で説明されなければならない」(p. 55)。

その過程の最も基本的図式は Wundt の明らかにしたシンボルとしての身振りの機能にみられる。「ある一定の社会的動作……の中で、ひとりの個人Aが他の個人Bにたいし、身振りによって、Bのなすべきことを指示するとき、はじめの個人Aはつぎのような場合に限り、かれ自身の身振りの意味を意識している……すなわちAがこの身振りにたいするBの態度をとりいれ、そしてBがAの身振りにはっきりと反応するのと同じようにBの態度に暗黙に反応しようとしている限りである」(p. 52)。このような外面的な身振り会話を内面化することが思考の本質である。他人が反応するように自分自身の身振りに反応するためにはとりわけ有声身振り(言語)が重要である。個人の行動(言語)が他人の中に引きおこした反応を自分自身の中にも引きおこし、すなわち他人の役割を取り入れ、それが個人の行動を統制していく過程が人間特有の反省的知能の基本的しくみである。しかも、反省作用は自我意識という条件のもとでだけおこる。なぜなら、理性的行為にとっては、人間が自分自身に対して客観的で非感情的な態度を採用することが必須だからである。自我にはそれがそれ自身にとって対象だという特徴がある。自我が社会的過程の文脈の中で生じないうちは人間は自己をその環境に全体として対置させることがない。さて、反省的知能を可能にする自我意識は他人の態度を取り入れることによって成立するが、その際、思考が普遍性をもつには、その他人の態度は個別の特殊なものではなく、様々な経験の中で、それらが結晶したもので、すなわち「一般化された他者 (generalized other)」でなければならない。その形成過程は発達的には、ごっこ遊びの後のルールのあるゲームの中に見られる。そして最終的には個人が属する共同体の組織化された態度を取り入れていくのである。しかし、ここで注意すべきことは自我は一般化された他者の態度の取り入れだけで成立しているのではないことである。Mead はここで自我における「I」と「me」という2側面を区別する。取り入れられた他者の態度の組織化されたセットが「me」であり、それは共同体の中で自分自身を制御するもので「フロイドの表現を借りるなら、『me』とはある意味での検閲官である」(p. 223)。「I」とはこのようにして登場してきた「me」に対して反応するものであり、「I」自体を対象化することはできない。さしあたって、ここで重要なのは、「me」の存在であろう。「われわれは、われわれに対する他者の関係において他者を認識できないなら、自分自身をもハッキリ自覚することはできない。個人が自我として自分自身をハッキリと自覚できるのは、他者の態度をかれが採用するからである」(p. 207)。Mead が使った「他者の役割の採用」ということから role-taking という用語がよく使われるようになったが、その中には原義とやや異なった意味づけがなされているものがあるようだ。「他者の役割を採用することは……自己を他者の位置におく能力であり、他者の能力、属性、期待、感情、潜在的傾向について推論する能力である」(Light, 1979, p. 10)と言われる場合、Mead が重視した自我成立の契機としてよりも、role-taking 自体が他者の視点を考慮する社会的認知能力と同義のように使われている。しかし、そのような能力は Mead がいう自我成立を前提して可能になることではないだろうか。これと関連して、Flavell ら(1968)も意味シンボルの使用は他者の役割特性の弁別と効果的伝達能力より先行しており、別のものであると言っている。

### (3) 国語学における視点論

時枝(1941, 1955, 1973)は言語を主体的表現行為とみる言語過程観に立って、言語に対する主体的立場というものを強調した。それは言語を聴覚映像と概念の結合体として社会的実体とみる

Saussure の言語観に対立するものである。時枝によれば、言語は言語主体の実践的活動としてのみ成立する。言語過程の大筋は次のようなものである。まず話し手において具体的事物あるいは表象が素材としてあり、それへの主体の志向作用である意味が生じ、概念化・一般化がなされ(省略される場合もある)、それが聴覚映像と連合され、さらに音声となって伝達され、聞き手において逆の過程が生じ理解が成立する。このように言語は具体的個人の活動としてのみ存在する。それでは言語の社会性はどのようにして保証されるか。それは言語行為が常に他者(聞き手)に向かって表現される行為であることからくる。そこでは聞き手に理解される表現であることが求められる。「言語の授受は、甲乙の間に必然的に言語の平均運動をもたらし、同一事物に対しては甲乙間に同一音声をもって表現し、同一音声に対しては同一事物を了解するという習慣も成立せしめるのである。……我々が他人の了解を求めようとする意識なくして、……我々の間に共通した言語習慣が成立することはあり得ない」(時枝, 1941, p. 140)。しかも共通した言語習慣が成立するのは、個人間の社会的交渉によるだけでなく、より本質的には各人に共通にある「受容的整序の能力」によると言う。これがいかなる能力か明瞭でないが、いずれにしろ、言語の社会性とは「対人関係を構成する機能」の意味なのである。従って、言語の規範性も「聴手に対してどうしたならば自己の思想を的確に伝えることができるであろうかと考え」ることに帰着する。時枝の言う「社会性」は、いわば Piaget 的な適応論としての社会性と共通しているように思われる。以上のような言語過程観に立つことによって、時枝は言語に対する2つの立場を識別した。一つは、実際に言語的行為をなす「主体的立場」である。いま一つは、言語を研究対象としてとらえ分析する立場で第三者として客観的に言語行為を眺める「観察者の立場」である。ここで重要なことは、観察者の立場が対象とする言語は主体的立場において行為された言語に他ならないことである。つまり「観察者の立場は常に主体的立場をその中に包含することによって始めて可能とされる」のである。主体を離れた言語それ自体を研究することはありえない。この時枝の2つの立場の問題はまだ言語における視点の問題にまでは至っていないが、そのための示唆として次の記述は重要であろう。「今乙が甲の言語を観察者の立場に立って対象とするためには、まづ観察者自らを主体甲の立場に置いてこれを解釈し、主体的な追体験をなし、さらにこれを観察者の立場において観察するという段階を経なければならぬ」(時枝, 1973, p. 359)。言語を主体的行為として捉えるとき、語には主体との関係で、すなわち表現の過程的構造によって2種が区別されるとする。一つは、「詞」もしくは「概念語」といわれるもので、素材(具体的事物、表象、主体の情緒など)を一旦、概念化して表現した語である。いま一つは、「辞」もしくは「観念語」といわれるもので、主体の観念内容(情緒など)を概念化せず直接的に表現した語であり、話者自身の立場以外ではなしえない言語表現の形式である。この「詞」と「辞」の関係は「詞」が「辞」によって「包まれる」関係にあるという。「詞」は概念化された志向対象であり、「辞」はそれに対する志向作用を表わす。以上のことを視点の問題からまとめてみよう。例えば、他人の文章の中に「我読まむ。」という文があったとする。まず観察者の立場からこの文を見るわけだが、過程的構造としてこの表現を解釈するためには、一旦この文の主体の立場に立って表現過程を追体験しなければならない。本来は観察者の立場にある者はこの文の主体ではないのだから、そこに意識の二重化があるといえよう。そのとき、この文の主語「我」は主体の観念の直接表現ではなく、主体の概念化された「詞」である。主体的立場はこの文では推量の直接表現である「む」

に表わされており、それが「辞」として主体的表現過程を総括している。以上から逆に、相手に理解される表現は自己の直接的観念内容を概念化しながら、自ら観察者の立場に立って「他者」の視点からながめ、「他者」が追体験できるように表現したものといえよう。ここで伝達としての言語表現が問題となってくる。「言語過程説の伝達論は、これを結論的に云えば、伝達の成立ということは、極めて悲観的であるということである。換言すれば、伝達の成立には、それ相当の条件を要することであり、伝達の当事者の努力と技術が要求されるということである」（時枝、1955, Pp. 27—28）。時枝のまとめた伝達図によると、話し手から聞き手へ伝達を成立させる唯一の手がかりは空間を経由してくる音声・文字だけである。「例えば、話手甲が、眼前に経験した『海』を、音声『ウミ』或は文字『海』によって表現したとする。これが、聞き手乙の聴覚或は視覚を刺戟する。聞き手乙は、この刺戟に基づいて、特定の概念なり、表象なりを頭に浮べて、ここに伝達が成立するのである。この際、乙が、甲から与えられた思想は、実は、甲から受渡されたものではなく、乙の主体的な連合作用によって乙自ら形成したものに他ならないのである」（p. 28）。ここで重要なことは、話し手が言語表現した対象はその対象そのままの表現ではなく、それをなんらか一般化し、連合する音声・文字に移行して聞き手の感覚を刺激するのであって、話し手の思想が聞き手に完全に伝達される保証は語自体には存しないことである。そこで、正しい伝達が成立するためには、「表現者が、表現において概念規定を加えること」が必要である。特定の「犬」を表現するのに言語としては「イヌ」としか表現できない。しかし、話し手はある特定の「犬」を聞き手に理解させたい。そこで、「毛の茶色の犬」とか「尾の短い犬」とかいう修飾語を使用する。もちろん、いくら修飾を重ねても個物自体の具体性を完全に表現することにはならないが、対象を余りに広い概念で把握したり特殊な把握の仕方をすれば、聞き手に正しく理解させることはできない。そこで、「相手の立場を顧慮しない表現は、しばしば、伝達を失敗に終らせる結果になる……聞き手が、最も理解し易い表現を選ぶことである」（p. 60）。

三浦(1967, 1976)は時枝の言語過程説における現象学的性格や言語の社会性についての一面的理解を批判しつつも、その独自の言語論を西欧の言語学にはほとんど見られなかったものとして評価し、言語における視点の問題をさらに掘り下げた。三浦によれば、ものの認識およびその表現には必ず同時にその認識の立場(視点)が伴う。この表現と立場の関係には2種のものが区別される。一つは、写真や写生のように客体についての表現が主体の現実の立場(位置)をもそのまま表わしている場合、すなわち表現の視点がそのまま現実の主体の視点でもある場合。いま一つは、地図のようにその表現が示す視点(例えば上空の一点)とそれを書いている実際の主体の視点(位置)が一致せず、分離している場合である。後者の場合は、「現実的な自己から観念的な自己が分裂して」いるわけである。そのことによって認識はより広汎になる。言語表現においても写真的な立場と地図的な立場がある。「野球や角力の実況放送のときは前者が中心となり、電話で道を教えたり事件を報告したりするときは後者になる。」そして、この「観念的な自己分裂」すなわち視点の二重化の問題は時枝のいう「主体的立場」と「観察者の立場」の問題と密接な関連がある。時枝では、その2つの立場は言語表現をもっぱら理解する場合にいわれたことであった。ある文を理解・解釈する場合、その文の観察者は、一旦、その文の「辞」に表現される主体の立場に観念的に立たなければならない。そこに、時枝は明確に示さなかったが、三浦のいう「観念的な自己分裂」すなわち視点の二重化がある。しかし、さらに重要なことは、言語を表現する主

体(話し手)においても、この視点の二重化があることである。「時枝は、観念的な自己の立場と現実的な自己の立場とのちがいを経験的にとらえて、主体的立場と観察的立場との区別を与えたわけであるが、『総ての言語はこの主体的立場の所産』であると、話し手の立場を一つにしてしまったところに行きすぎがあった。これは話し手の写真的な位置と地図的な位置とのちがいを、論理的に抹殺してしまったことにほかならない」(三浦, 1967, p. 38)。話し手は聞き手に正しく伝達するためには、時枝のいう理解の過程とはむしろ逆に、話し手の主体的立場から観察者の立場へ移行し、そこで聞き手の立場を考慮した表現を作り出さなければならないのである。

### III. 言語的対象指示伝達 (referential communication) をめぐる最近の論点と実験

#### (1) social cognition としての言語伝達能力

Flavell ら (1968) は、効果的な言語的伝達をするためには、他人の諸特性を識別する role-taking 能力が不可欠であるとみて、自己中心的な不適切な伝達と非自己中心的な効果的な伝達のしくみを説明している。自己中心的伝達がなされる過程は①話し手が素材を自分だけに意味のわかる仕方でもコード化し、②その私的なコーディングを修正することなく、そのまま外化して聞き手に送ってしまうものである。それに対し、非自己中心的伝達の過程は①話し手が素材を自分だけに意味のわかる仕方でもコード化するが、②次にメッセージの解読に関連する聞き手の特性を弁別し、③それにもとづいて素材を再コード化して聞き手にメッセージとして送る。その際、聞き手の要請にできるだけ合うようにすることと自分だけにわかる最初のコード化へと逆行しないよう抑制することが必要である。もちろん効果的伝達のためには、単に role-taking 能力だけでなく、認知的言語的諸能力が必要なのは言うまでもない。Flavell (1974) はまた他者についての推論過程のより一般的図式を提起している。それによると、推論過程は Existence→Need→Inference→Application という4つの成分の系列から成る。Existence 成分は、人がなんらかの内潜的心理過程をもっていることの基本的認識を示す。ここには、自分の心的過程が他者のそれと異なっていることの理解をも含む。Need 成分は、現在の場面が他者の心的特性についての推論を必要としていることに気づくことを示す。ここには、実際は推論能力をもっているにもかかわらず、それを自発的に稼働させないという一種の産出欠如の問題も含む。Inference 成分は、実際の推論活動を示す。Application 成分は推論に引続く他者に対する実際の反応を示す。しかし、Flavell は他者視点の考慮という能力を重視してはいるが、それに関して情報処理論的に諸成分に分解しているだけで、その能力の心理的構造・形成の解明は不十分のように思われる。

Higgins (1981) は role-taking の本質は他者の観点・特性を推論する際に自分自身のそれを自己統制し他者と混同しないことであるととし、状況として自分の観点が優勢で他者の観点が自分とは異なる場合に他者について正しい推論がなされたときに明確に role-taking があるといえるという。自分と他者の観点が異なる事態には2種類が区別できるという。一つは、状況の違いによって観点の違いが生じる場合で、いわゆる「3つ山」問題がそれに当たる。いま一つは、個人の特性の違いに関して判断する場合で、これには同じ状況について他者の判断は自分のとはちがうことがあるのを理解することおよび自分自身について他者の観点から判断することが含まれる。後者は前者より一般的に難しい。role-taking を以上のように限定することによって、

従来取り上げられてきた多くの課題が role-taking 以外の要因で解釈できる。例えば、ある種の referential communication 課題では様々の非指示対象から指示対象を叙述しなければならない場合に比較判断だけでも可能である。

Shatz と Gelman (1973) は 4 歳児に対し、おもちゃの使い方を 2 歳児と成人に教える課題を実施したところ、聞き手に応じて、注意の促し方や構文に違いが見られた。このことから、4 歳児でも伝達で聞き手に対して調整する能力があると結論している。この実験は 4 歳児にも role-taking がある例としてよく引用されるが、Higgins (1981) のいうように“speech style”のような他の要因でも説明可能である。

Menig—Peterson (1975) は聞き手に応じたメッセージの変更あるいはメッセージ内容の適切さという指標のとり方で自己中心性の判定に食い違いが生じることを示している。

Meissner と Apthorp (1976) は 4, 5 歳児を使って、お店やさんごっこという遊び場面で相手(成人)が目かくしをしている条件と目がみえる条件とで教え方に差があるか調べたところ、39 名中 11 名は両条件とも明確な命名をし、12 名は目がみえる条件では指さし、目かくし条件では適切な命名をしたが、14 名は目かくし条件でも指さしという自己中心的反応を示した。この結果から就学前児でも聞き手の要求を考慮できるのだと結論している。類似の傾向は Maratsos (1973) にもみられる。

年少児にも一定の role-taking はあるのだという研究結果(次節の情報処理能力論的アプローチにもみられる)に対して Robinson と Robinson (1980) は効果的な言語伝達で問題なのは、単にその場面で有効なメッセージを送るといえば行動的適応ではなく、伝達においては相手の見地を考慮する必要があることの意識的理解なのだと言っている。年少児では社会的言語の使用はあっても意識的理解は欠いているのであり、その点で Piaget の「自己中心性」の概念は依然として有効であるとしている。Light (1979) も role-taking の初歩形態は年少児で生じるがそれはまだ文脈や教示の手がかりに依存していると述べている。

## (2) 情報処理能力としての言語伝達能力

Shatz (1977) はコミュニケーションのような複雑な認知課題にとって重要なのは、成人も幼児も基本的には差のない処理容量 = 資源の中でいかに効率よく処理技能を組み合わせる資源を活用するかの能力であるという。従って、情報の熟知性と考慮しなければならない情報の量が一定の処理能力の水準での課題の遂行を決定するといえる。Shatz と Gelman (1973) によると 4, 5 歳児に 2 歳児と同輩に対し 4 個の選択肢から各々に適切な贈り物をするよう求めたところ、正しく選択できた。これは、4, 5 歳児でも他人の要求や好みも考慮できることを示しているという。ところが、選択肢の数を 6 個に増やすと不適切な反応を示した。これは、課題に必要な技能をもっていてもその行使は情報の質と量に依存することを示しているという。

Asher (1979) は言語的指示伝達で分析する必要があるのは、自己中心性とか視点取得とかの一般的能力ではなく、個々の課題に応じた特殊な能力だということ。比較能力の低い年少児でも能力に見合った課題であれば正しく伝達できるし、実験場面より日常的場面の方が手がかりが多いので伝達がよくできるのである。

Beaudichon と Bideaud (1979) も自己中心性はある発達段階の主要な特徴とは考えられず、課題が新奇で難しかったり、対人的相互作用が制約されているときの現象だとする。Houssiadis

と Brown (1980) も新奇な状況では自己が優勢になるため、自己中心性におちいるのだとして、課題との関連を重視している。

Chandler と Boyes (1982) は主体の認知構造よりも他者あるいは課題の要求するそれがより上位の水準にあるとき、それらは実際より低く認知されてしまう。それが自己中心性といわれる現象だという。

Asher と Oden (1976) は被験児自身が発したメッセージを2週間後に本人に聞かせて対象を同定できるか調べたところ、単なる記憶と同水準にとどまった。ここから、自分のメッセージでもわからないのだから、不適切な伝達の原因は自己中心性ではなく、比較活動の不十分にあると結論している。

これらに対し、Robinson と Robinson (1976, 1977, 1978 ab) は役割取得能力を重視する立場から一連の実験を行なっている。基本パラダイムは伝達場面を被験児に観察させ、伝達の失敗の責任が話し手と聞き手のどちらにあるかを判定させるものである。その結果、対象を同定するのに必要な属性について比較活動ができるのに、伝達場面では相手の条件の考慮という伝達の特質が理解できない自己中心的な者が存在することが示された。

#### IV. まとめと今後の検討課題

本稿における最大の論点は Piaget が言うように幼児は「自己中心的」なのかどうかをめぐる問題であった。それは、従来、幼児心性の社会性をめぐる問題として論じられてきた。しばしば、Piaget は精神発達を個人的なものが徐々に社会化していくものと見なしているとして批判されてきた。しかしながら、Piaget のいう「自己中心性」は心理機能の起源が社会的か個人的かの問題としてよりも、意識化の問題として、さらにそれを可能にする論理操作の問題として考えられていることを見た。従って、Wallon らのように発達の初期から社会性を見る見方と Piaget のように意識化による社会性を見る見方とは対立するものでなく、むしろ相補的なものと考えべきではないだろうか。従来の言語的対象指示伝達の諸実験もこの点から見直す必要がある。一方で、情報処理スキルの問題としてとらえ、課題を易しくすれば、年少児でも適切な伝達ができることを示し、かなり早期から役割取得能力があると見る。他方で、社会的認知の意識性を問題とし、年少児にはその能力に限界があること、つまり自己中心的であると見る。前者の実験での子どもの反応は文脈依存的で行動的適応の面が強いので、そこから Piaget らのいう幼児期の「自己中心性」を否定するのは性急ではないかと思われる。意識化を考えると「自己中心性」の概念はやはり有効だと思う。具体的な心理機能に即して初期からの社会性と意識化による社会性を統一的に把握していくことが一つの課題になるだろう。

次に、意識化と認知的他者理解は Piaget が言うように論理操作の問題に解消できるだろうか。Piaget ではおそらく前提されてしまっていて特別の考察の対象にはされなかった自我機能との関連を抜きにしては認知機能は解明できないだろう。Piaget のような「理想的な均衡の状態における心理の論理学 (psycho—logique) でもなく、社会の論理学 (socio—logique) でもなくて、具体的なひととひとのかかわり合いの場において、(われ—きみ—かれといった)『人稱的』(personnel) なかかわり合いの場においてある『ペルソナ』としてのひとのあり方の基本的構造をあきらかにするペルソナの論理学 (persona—logique) とでもいったものを仮に考えてみる」

(坂部, 1978, p. 28) が必要であろう。視点の二重化の問題やメタ認知・メタ言語といわれる領域もこのような自我機能という視点からとらえ直す必要がある。

本稿は言語伝達を扱いながら、肝心の「コミュニケーション」の分析がほとんどなされなかった。前言語的コミュニケーションや言語そのものの文脈としてのコミュニケーションの分析がさかんに行なわれているが、それと社会的認知との関連は重要である。とくに発話行為理論 (speech act theory) と時枝の言語過程説や三浦の視点論との関連の検討は興味深い問題である。

#### References

- Asher, S.R. 1979 Referential communication. In Whitehurst, G.J., & Zimmerman, B.J. (Eds.) *The functions of language and cognition*. New York: Academic Press.
- Asher, S.R., & Oden, S. 1976 Children's failure to communicate: An assessment of comparison and egocentrism explanations. *Developmental Psychology*, 12, 132-139.
- Beaudichon, J., & Bideaud, J. 1979 De l'utilité des notions d'égo-centrisme, de décentration et de prise de rôle dans l'étude du développement. *L'Année Psychologique*, 79, 589-622.
- Chandler, M., & Boyes, M. 1982 Social-cognitive development. In Wolman, B.B. (Ed.) *Handbook of developmental psychology*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Flavell, J.H. 1974 The development of inferences about others. In Mischel, T. (Ed.) *Understanding other persons*. Oxford: Basil Blackwell.
- Flavell, J.H., Botkin, P.T., Fry, C.L., jr., Wright, J.W., & Jarvis, P.E. 1968 *The development of role-taking and communication skills in children*. New York: Wiley.
- Freud (フロイト), S. 高橋義孝訳 1968 (原著初版1900年) 夢判断. 井村恒郎ほか編 フロイト著作集 2, 人文書院
- Higgins, E.T. 1981 Role taking and social judgment: Alternative developmental perspectives and processes. In Flavell, J.H., & Ross, L. (Eds.) *Social cognitive development*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Houssiadass, L., & Brown, L.B. 1980 Egocentrism in language and space perception: An examination of the concept. *Genetic Psychology Monographs*, 101, 183-214.
- Light, P. 1979 *The development of social sensitivity*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Maratsos, M.P. 1973 Nonegocentric communication abilities in preschool children. *Child Development*, 44, 697-700.
- Mead (ミード), G.H. 稲葉・滝沢・中野訳 1973 (原著初版1934年) 精神・自我・社会. 現代社会学体系 10 青木書店.
- Meissner, J.A., & Aporthp, H. 1976 Nonegocentrism and communication mode switching in black preschool children. *Developmental Psychology*, 12(3), 245-249.
- Menig-Petersosn, C. 1975 The modification of communicative behavior in preschool-aged children as a function of the listener's perspective. *Child Development*, 46, 1015-1018.
- 三浦つとむ 1967 認識と言語の理論第一部. 勁草書房.
- 三浦つとむ 1976 日本語はどういう言語か 講談社.
- Piaget, J. 1923 La pensée symbolique et la pensée de l'enfant. *Archives de Psychologie*, 18, 273-304.
- Piaget, J. 1924 *Le jugement et le raisonnement chez l'enfant*. Neuchâtel: Delachaux et Niestlé.  
(滝沢・岸田訳 1969 判断と推理の発達心理学, 国土社)
- Piaget, J. 1928 Les trois systèmes de la pensée de l'enfant. *Bulletin de la Société française de Philosophie*, 28, 97-138.
- Piaget, J. 1947 *La psychologie de l'intelligence*. Paris: A. Colin. (波多野・滝沢訳 1967 知能の心理学 みすず書房)

鈴木：幼児の言語的伝達における自己中心性の問題

- Piaget, J. 1948 *Le langage et la pensée chez l'enfant. 3<sup>éd.</sup> (1<sup>éd.</sup> 1923)* Neuchâtel: Delachaux et Niestlé. (大伴茂訳 1954 児童の自己中心性。同文書院。3版は増補)
- Piaget, J. 1950 *Introduction à l'épistémologie génétique, tome III.* Paris: P.U.F. (田辺・島雄訳 1980 発生的認識論序説第Ⅲ巻。三省堂)
- Piaget, J. 1951 *Pensée égocentrique et pensée sociocentrique. Cahiers internationaux de sociologie, 10, 34-49.*
- Piaget, J. 1960 *Problèmes de la psycho-sociologique de l'enfance.* In G. Gurvitch (Ed.) *Traité de sociologie, 2.* Paris: P.U.F. (芳賀純編訳 1979 発達の条件と学習 誠信書房 所収)
- Piaget, J. 1962 *Comments on Vygotsky's critical remarks concerning The Language and Thought of the Child, and Judgment and Reasoning in the Child.* Cambridge: M.I.T.P.
- Piaget, J. 1966 *La psychologie de l'enfant.* Paris: P.U.F. (波多野ほか訳 1960 新しい児童心理学 白水社)
- Piaget, J. 1977 (1<sup>éd.</sup> 1920) *Psychoanalysis in its relations with child psychology.* In Gruber, H.E., & Vonèche, J.J. (Eds.) *The Essential Piaget.* New York: Basic Books.
- Robinson, E.J., & Robinson, W.P. 1976 *The young child's understanding of communication. Developmental Psychology, 12, 328-333.*
- Robinson, E.J., & Robinson, W.P. 1977 *Children's explanations of communication failure and the inadequacy of the misunderstood message. Developmental Psychology, 13, 156-161.*
- Robinson, E.J., & Robinson, W.P. 1978 a *The roles of egocentrism and of weakness in comparing in children's explanations of communication failure. Journal of Experimental Child Psychology, 26, 147-160.*
- Robinson, E.J., & Robinson, W.P. 1978 b *Development of understanding about communication: Message inadequacy and its role in causing communication failure. Genetic Psychology Monographs, 98, 233-279.*
- Robinson, E.J., & Robinson, W.P. 1980 *Egocentrism in verbal referential communication.* In Cox, M.V. (Ed.) *Are young children egocentric?* London: Batsford Academic.
- 坂部 恵 1978 総論——人称的世界の論理学のための素描。田島節夫ほか編 講座現代の哲学2 人称的世界。弘文堂。
- Shatz, M. 1977 *The relationship between cognitive processes and the development of communication skills.* In Keasey, G.B. (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation, 1978.*
- Shatz, M., & Gelman, R. 1973 *The development of communication skills: Modifications in the speech of young children as a function of listener. Monographs of the Society for Research in Child Development, 38 (5, Serial No. 152).*
- 竹内良知 1982 アンリ・ワロン(竹内訳) 子どもの精神的発達。訳者あとがき。人文書院。
- 時枝誠記 1941 国語学原論 岩波書店。
- 時枝誠記 1955 国語学原論読篇 岩波書店。
- 時枝誠記 1973 言語本質論 岩波書店。
- Виготский (ヴィゴツキー), J.C. 柴田義松訳 1962 (原著初版1934年) 思考と言語 明治図書。
- Wallon, H. 1946 *Le rôle de «l'autre» dans la conscience du «moi.» Journal Egyptien de Psychologie, 2; rééd. in Enfance, 1959, 3-4, 279-286,* (谷村・浜田訳 1980 『自我』意識の中で『他者』はどういう役割をはたしているか。発達, 1(1)。ミネルヴァ書房)
- Wallon, H. 1956 *Niveaux et fluctuations du moi. L'Evolution psychiatrique, 1, 389-401.; rééd. in Enfance, 1963, 1-2, 87-98.* (麻生・浜田訳 1940 自我の水準とその変動。発達, 1(2)。ミネルヴァ書房)。

(本研究科博士後期課程)